

インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

— 出会いとすれ違いの序 前編

インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

母さんが旅行に行っている間に問題となるのがご飯の事だ。恥ずかしい事に今までほとんど料理をした事がない私は地味に悩んだ。

そんな時に救世主が現れた。

「料理ならアタシが教えるよ」

ご飯問題についてシマさんに話すと、彼女は何でもないようにそう言つた。

「本当？ ありがとう！」

こういう時に人との繋がりの大切さが身に染みて分かる。

「豆腐の大きさはこのくらいで……」

「なるほど」

何となくで料理していたと言つていたように、シマさんの指示は「大体」や「どばーっと」など、ふわっとしていたけれど、徐々に食材はフーチャンブルーとなつていった。

「はい、それで完成ね」

「ありがとうございます！ ちゃんと料理したのって初めてだけど、何とかできた……」

「初めてにしては上出来じゃない？ たまちゃんは作り慣れれば直ぐに上達するよ」

ニヤッと笑いながらシマさんは言つた。

現在、私の母は友達と県外に旅行に行っている。た。

「次は調味料ね」
隣にいるシマさんの指示を聞きながら私は手を動かした。
「りょうかい」
今、台所に立つて作つているのは夕飯に食べる予定のフーチャンブルーだ。
「何分くらい炒めればいいかな？」
「うーん……何分つて言われてもなあ。アタシは何となくで料理をしてたから。ま、アタシが隣で見ているから何とかなるでしょう」
「頼りにしている」

情けない顔で笑いながら、私はシマさんに言つた。

「ありがと。あ、そう言えば」

「何？ たまちやん」

「シマさん、この後の今日の予定は？」

そう訊ねると。

「あー、夜にナハの方で好きなバンドがライブをするから、それを観てくる」

考えるようにしてシマさんは答えた。

「そうなんだ」

「前から楽しみにしていてね……あ

「何？ シマさん」

シマさんは時計を見た。

「そろそろ時間だからアタシは行くね」

「うん。今日はありがとう」

「それじや」

そう言つて、ひらひらと手を振りながらシマさんは壁をすり抜けて行つた。

シマさんは靈なのだ。

「さてと。皿に盛りつけますか」

力チャカチャと食器棚から少し大きめの皿を出して、鍋からフーチャンブルーを移す事にした。

★
「リョウ君、明日から新しい学校だね。準備はできている？」

「ソファーに座りながら岩男さんは訊ねてきた。
「はい。大体の準備は」

「楽しい学校生活になればいいね」

「穏やかな笑みを浮かべて岩男さんは言つた。

「ありがとうございます。あれ、浮鳥(うきう)と坐

道(ざみち)は？」

さつきまで二人ともこの部屋の中にいたはずだけれど。

「ああ、あの二人はどこかへ行つたよ。見知らぬ土地なのにまつたく……」

岩男さんは呆れた表情を浮かべながら言つた。

「そうですか。まあ、誰が何を言つても勝手に動きますからね、二人とも」

苦笑しながらそう言うと。

「いや、一回ちゃんと話し合つた方がいいと私は思うよ」

真剣な目付きになつて岩男さんは続けて言つた。
「私たち三人が存在する最大の理由は、君を守る事だからね」

岩男さんのその言葉を聞いた瞬間に、僕の心をさ

さまざまな感情が駆け巡り。

「……ありがとう、岩男さん」

口から自然と言葉が零れ落ちた。



「へえー……そう」

「たまも後で見に……って、やば！ そろそろ先生がくる！」

バタバタと音をたてて春は自分の席へと戻つていった。

「イケメンねえ」

筆箱から鉛筆を取り出して、私は呟いた。



授業を知らせる鐘の音が校内に鳴り響く。

「次は歴史の授業だよね……」

引き出しの中から教科書を机に出して準備をしていると。

「ねえ、たま」

クラスメイトの春が話しかけてきた。

「なに？」

「今日さ、三組に転校生が来たの、知っている？」

「ああ、うん。朝に噂している人がいたね」

「それでき。今、三組に行つて転校生を見てきたんだけど結構イケメンだつたよ」

軽く興奮気味に春は言つた。

「ふーん」

「名前何て言つたかな……そうだ！ 都宇上（どうがみ）りょう君つて名前だつたはず！ 県外から転校しちゃたらしいけど」

「やあ、リョウ君」

転校初日を無事に過ごして帰宅しようと校門を出ると、岩男さんがいた。

「何かありました？ 岩男さん」

「いや、特には」

セミロングの金髪を揺らしながら岩男さんは言つた。

「リョウ君が心配でね」

「岩男さんは心配性だなあ……」

「同じ事を浮島にも言われたよ。それじゃあ帰ろうか」「はい」

新しく住むことになった一軒家へ、僕と岩男さんは帰る事にした。

☆

「ただいま」

学校から帰つて、玄関で靴を脱いでいると

「お、おかえりなさい」

天井をすり抜けてシマさんが現れた。

「あ、シマさん。来てたの？」

シマさんの唐突な出現には割と慣れているので驚く事無く私は話した。

「うん、まあね……あ！　き、今日、学校はどうだった？」

「うん？　いや、別にいつも通りだつたけど」

「そ、そつか。あ、昨日作つたフーチャンブルーはどうだつた？　美味しかつた？」

「普通に美味しかつたけど……」

話しながら私は違和感を覚えた。

シマさんがこういう風に何でもない話題を振つてくる時は、何かを隠している場合が多いからだ。

「シマさん」

「な、何？」
ぎこちない笑みを浮かべながらシマさんは返事をした。

「もしかして、何か隠している？」

「え、ええ……ど、どうしてそう思うの？」

言いながらシマさんは、ちらちらと二階へと続く階段を見ているような気がした。

「ん？」

私も何となく、二階に意識を向けてみると。

「……もしかして、誰か二階にいるの？」

「うえ？　い、いや、それは……あの」

明らかに拳動不審になるシマさんの様子が、もう答えているようなものだ。

「バレてるか……。分かつた、今連れてくるね」

「すうつ、と二階にシマさんは消えていった。

「もう」

人が良いというか何というか……。

シマさんはたまに困つている見知らぬ靈を連れてくる事がある。

なるべく止めた方がいいと話したはずだけ……。

「いやー」

音もなくシマさんは戻ってきた。

「実はね、昨日ライブを見た後にふよふよと散歩していたら、泣いている靈がいてさ。何か困っている感じだったから、放つて置けなくて……おーい」

天井に向かってシマさんが呼びかけると。

「……」

女の子の靈が静かに姿を現した。

「この子なんだけど……」

綺麗な色の着物を着た女の子は、私と同じか少し下の年齢に見えた。

「どうも……」

控えめに女の子は挨拶をした。

「こ、こんにちは……ちょっとシマさん」

私は手招きをして、シマさんを近くに呼んだ。

「靈が見えたりするだけで、別に私は靈能力者って訳じゃないんだからね！」

コソコソと耳打ちをして隣のシマさんに言つた。

「わ、分かっているけどさ。あの子、独りで泣いていて放つて置けない感じだったし……それに、たま

ちゃん以外に靈が見えたりする人ってアタシ知らないし」

「うーん……」

どうしよう……困った。

前に母さんに、「中途半端に靈と関わるな」と注意された事がある。

実際に関わって痛い目に遭つた事もある。

「あ、あの……」

可愛らしい綺麗な声で女の子は私に話しかけてきた。

「ご迷惑でしたら私は……」

消え入りそうな声で女の子は言つた。

「うーん……」

数秒、私は考えた。

「……うん」

連れてきたものはしようがないかな……。と、私は自棄に似た決心をした。

「と、とりあえず話をしましよう」

「ありがとう、たまちゃん！」

シマさんは私に抱き寄いで嬉しそうに声を上げた。

つづく